

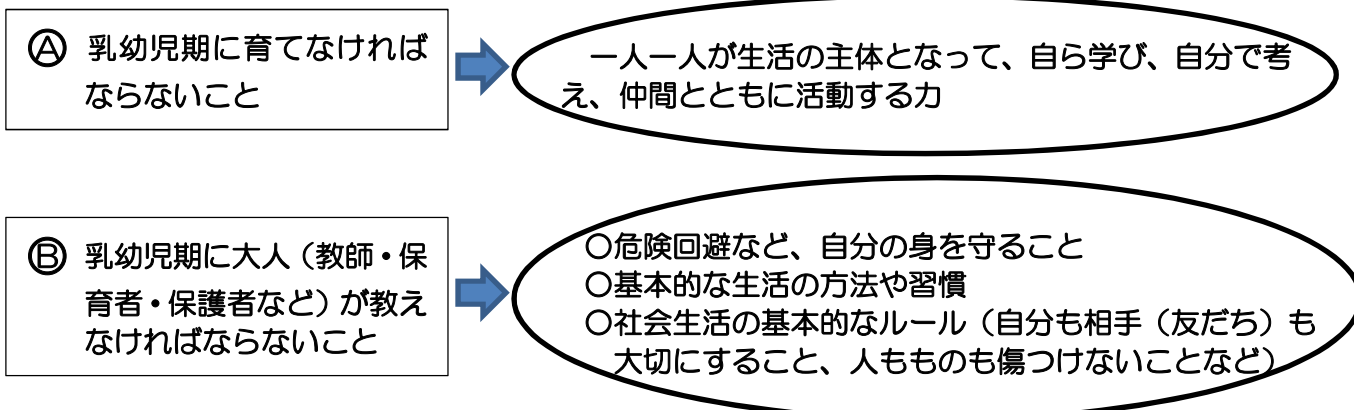
「就学前教育の充実と義務教育への円滑な接続について」

滋賀県国公立幼稚園長会 会長
甲良町立甲良東幼稚園 園長
(甲良東保育センター) 大橋 美智子

◇乳幼児期の保育・教育の基本的な考え

- ① 生を受けたその瞬間から、ひとは「自分の人生を自分で生きようとする力」をもっているもの。そのことを大前提において、私たち大人（親・家族・教師・保育士（以下 保育者）など）はどんなに小さな年齢の子どもたちであっても“ひとりの人格をもったひと”として接すること。
- ② ①の基本をもとに、年齢の発達の様や個々の生育状況に応じて、その子どもにとって自ら生きていくために必要なことを身に付けられるように時間をかけて繰り返し具体的な手立てを知らせたり援助したりすることが乳幼児期の教育・保育。

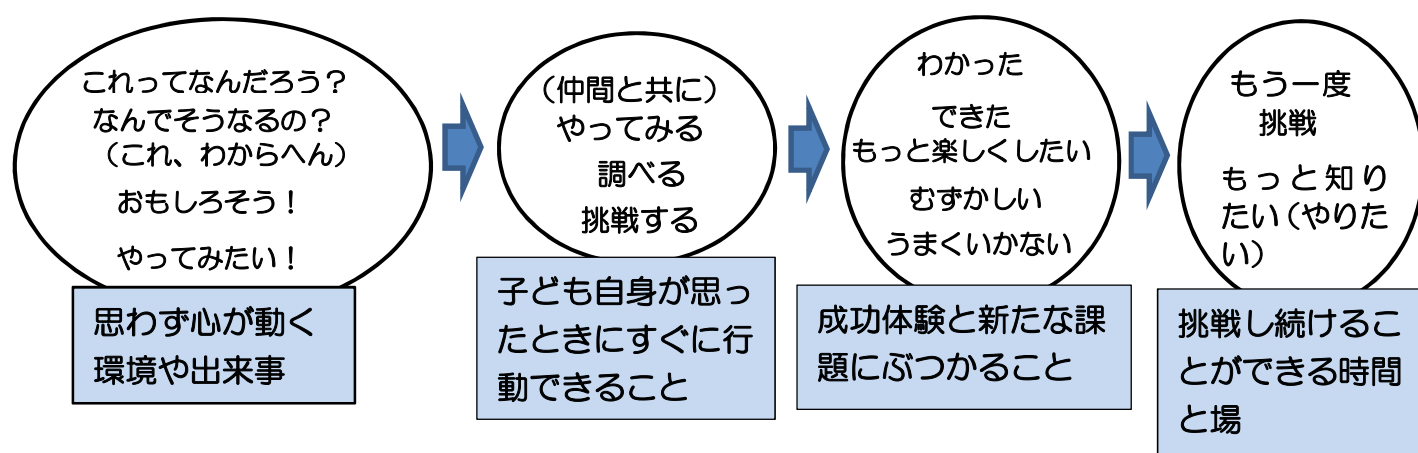
◇「学ぶ力」は乳幼児期から育てる。（乳幼児期に育てないといけないもの）



⑤のように、社会の一員として、将来、どのような生活をするかということを繰り返し、丁寧に伝え教えていくことがとても大切であり、乳幼児の生活の基本になる。その生活を土台にして、④のように、子どもたちが自分で物事に触れ親しむことを通して、仲間とともに考え体験したことを自分の力として溜め込み、次の活動（学び）へと生かしていく毎日が子どもたちに「学ぶ力」を育てる。

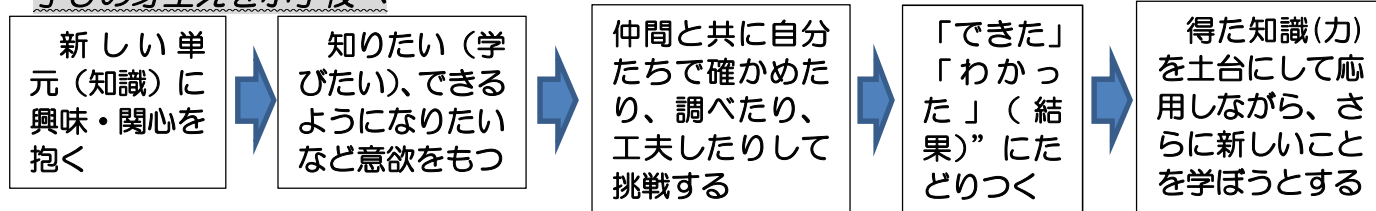
また、⑤の○の特に下の○については、大人が一方向的に教えるのではなく、子ども自身が生活の中でぶつかり、大人（保育者など）と一緒に考えながら気づき、身に付けていくものである。

幼稚園・保育所等での生活

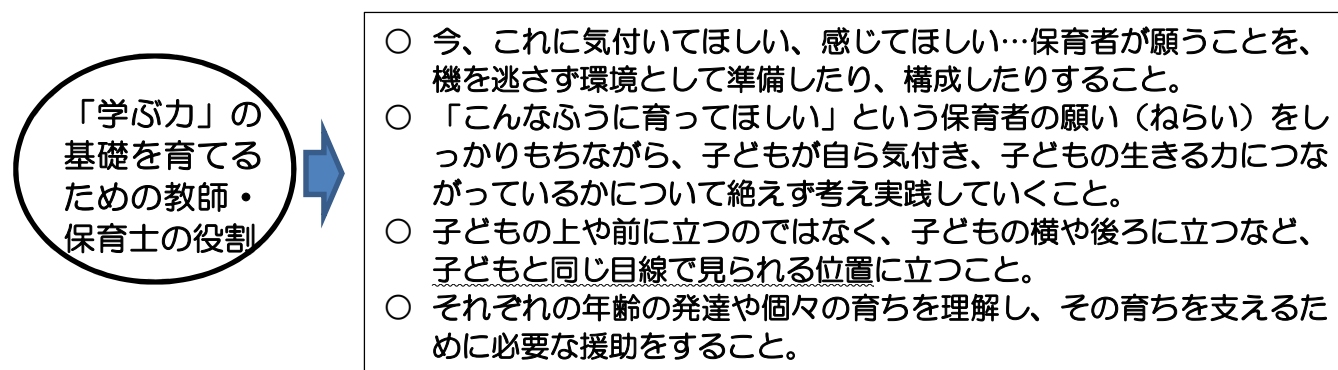


子どもたちがこれらの活動を繰り返すことこそが「学ぶ力」の土台である。この「学ぶ力」は「知識を得る」という狭義なものをさすのではなく、また、決して大人から一方的に指導して教えるものではない。子どもたちが自分の生活の主体者となって活動する毎日の中で友だちや教師とかかわりあいながら育っていくもの。

学びの芽生えを小学校へ



子どもの主体的な学びを支える保育者の役割は…



◇義務教育（小学校）へつなぐ

小学校では、文字が読める・書ける、話がきちんと聞けるなど、目に見えることだけが重要視されてしまうことがとても残念である。幼稚園・保育所等では、子どもの気付きや心の動きに即して環境を構成し、学びの芽生えを育んでいる。

- ①「このつみきをこわさないでください」「あした おみせやさんをするからきてね」など、文字で遊びや思いを伝えることができることを知ること、文字の必要性に気付く。
⇒この“文字”への関心が「文字を読めるようになりたい。書けるようになりたい」に。
- ②「草花の色水に石鹸水を混ぜたら色が変わった！ 不思議！ どうして？」 ペットボトルをプールに持ち込んで遊んでいた子どもたちが「ペットボトル、水の中に入れたら消えたで！」など、遊びの中での気付きや発見、体験は小学校以降の学び意欲につながる。⇒学びの芽生え
- ③「おもしろそう」「何故？」など、心が動く子どもたちは耳を傾ける。⇒本当の「聴く力」

上記のように、就学前の子どもたちは「学ぼう」として学んでいるのではなく、主体的にまわりの物事にかかわり活動する中で学びの土台となることを経験として溜め込んでいく。その溜め込んだ経験が小学校以降の主体的に学ぶことにつながり、鮮明に子どもたちの中に取り入れられると思う。

この重要な関係性を幼稚園や保育所等の保育者と小学校の教師が互いに共通認識していないと、子どもたちが毎日、いっぱい遊んで溜め込んできたことが、その後の教育にうまく生かされないのではないかと考える。

幼稚園・保育所等の保育者は、自分たちの教育・保育がどのようにその後の教育につながっていくのか。小学校の教師は、幼稚園・保育所等で乳幼児期にどのような活動・体験をし、力を蓄えてきているのか。

お互いの教育・保育について具体的に交流し合い、共同で学び合う機会（研修の機会）が必要だと感じる。